

1 1	海部	津島市立神守中学校	オオタニ エミナ
分科会番号	8	分科会名	音楽教育
			名前 大谷 依実南

研究題目

他者との主体的な関わり合いの中で、自己を高める生徒の育成
—模倣を生かした学習活動の試み—

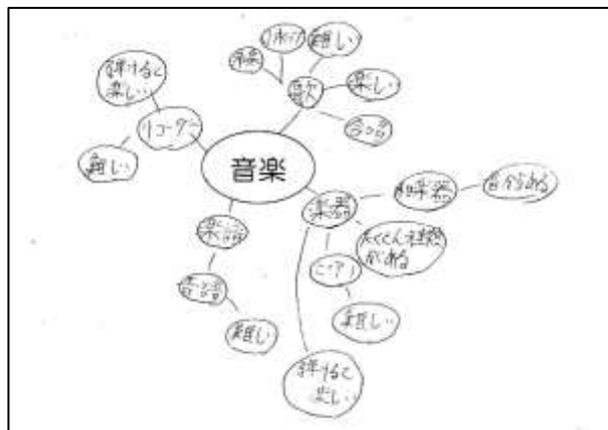
※本研究における「模倣」とは、他者の考えを受け入れ、自己の考えを深めていく活動を意味する。

研究要項

1 はじめに

本学年（中学3年）は、男子73名、女子77名の計150名である。真面目で、素直な生徒が多く、音楽科の授業では、多くの生徒がペアやグループ活動など、授業内の学び合いに積極的に参加しようとしている。学校祭や3年生を送る会など、学校行事での合唱では、歌唱力を高めようと一生懸命、練習に取り組んできた。一方で、感想や意見を言葉にして述べたり、相手の表現や考えから、さらに自分の考えを深めたりすることが苦手な生徒が多く、ペアでの話し合いやグループ活動では、一方的なやりとりになってしまう様子が見られる。また、パート練習では、意見を出せる生徒が少なく、発言があったとしても「声量を上げて」「強弱を付けて」といった、短絡的な指示が多く聞こえてくる。そのため、生徒の中にある、音楽に関する語彙が少なく、自己の思いや意図を表現する力が乏しいように感じる。

さらに現状を把握するため、音楽と自分との関わりについてのアンケートをマッピング形式で実施した。その結果、音楽は楽しいものだと感じる生徒が多くいた【資料1】。また、歌うことや好きな音楽を聴くこと、演奏することなどについて、おおむね親しみをもっていると読み取ることができた。そのため、視野を広く持たせることで「授業で習う音楽」と「生活の中の音楽」を結び付け、学習の気付きが身の回りにある音楽を豊かに聴くヒントであることに、生徒たち自身に気付かせたいと考えた。



【資料1】学習前のイメージマップ

そこで、自分と音楽との関わりを深める手立

てとして、他者との対話の中で相手の価値観・音楽表現の方法にふれることで、音楽についての新たな価値を生み出すことができるのではないかと考えた。他者理解をきっかけとして得られる自己理解のために、まず自分と他者とを比較し、その差異点や類似点を言語化することで、相手の思いや意図について考えさせたい。次に、互いに評価し、アドバイスをすることで、さまざまな音楽表現について自分なりに価値付けをさせたい。そして、模倣をテーマとしたさまざまな活動の中で、生徒たちの気付きから、ふさわしい音楽表現を創意工夫できることを目指す。

中学校卒業後も、生徒たちは必ず他者との関わりの中で生活していく。音楽の授業をきっかけに、生活の中での音楽の聴き方が変わってほしい。そして、自己と音楽との関わりを深め、広げていくことで、生涯にわたって音楽に親しみ、味わうことができる生徒の育成を目指す。

<目指す生徒像>

自分と音楽との関わりを深めるために、相手を知り、自分を知ること、音楽表現を確立することができる生徒

2 研究仮説

- (1) 自分と相手を比較し、その差異点や類似点を言語化することで、相手の音楽表現に対する思いや意図について考え、自分たちの課題を見付けることができるだろう。
- (2) お互いの音楽表現を評価し合ったり、アドバイスし合ったりすることで、相手に伝えようとする気持ちの大切さについて気付き、さまざまな音楽表現について自分なりに価値付けをすることができるだろう。
- (3) 模倣的な活動を通して、音楽との関わりを深め、自己の音楽表現について試行錯誤し、創意工夫することができるだろう。

3 研究の手だて

(1) 自分と相手を比較し、自分たちの課題を見付ける取組。

<内容> 録音による比較、録画による比較、タブレットを用いた作品づくりとふりかえりの共有

(2) お互いの音楽表現について、自分なりに価値付けをする取組。

<内容> グループ同士での歌声の聴き合い、アドバイスの交換、ふりかえりシートへの記録

(3) 模倣的な活動を通して、自己の音楽表現について創意工夫するための取組。

<内容> 4人グループでの練習、歌詞譜(ワークシート)を用いた気付きの共有、仲間の音楽表現の模倣、発表会の設定、タブレットによる一言アドバイスの共有

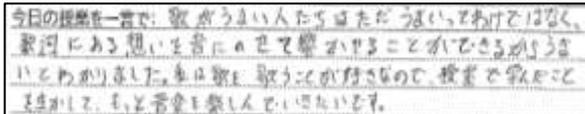
4 研究計画

月	学習活動	気付けたいこと、理解させたい要素
4・5月	「上手に歌うってなに?～響きに気付く～」 教材:「発声練習」「僕のこと」	響き、強弱、強弱とそのイメージ
6月	「言葉の抑揚を生かしたリズムづくり」	構成、リズム
7月	「この曲で伝えたいことはなんだろう?～歌唱表現を工夫する～」教材:「花」	強弱、音色、音楽記号の表現
9月	「響き合おう」教材:「合唱曲」	曲にふさわしい歌唱表現
10月	「曲想と旋律の動きに着目して」教材:「荒城の月」	音色、構成、旋律
1～2月	「最高の卒業式～これまでの学びを生かして～」教材:卒業の歌	

5 研究の実践と考察

(1) 自分と相手と比較し、自分たちの課題を見付ける取組。

『上手に歌うってなに?～響きに気付く～』の題材では、はじめに「歌が上手とは、どういうことだろう」と尋ねると「音程が取れる」「声量がある」という意見が多く出た。そこで、録音した自分たちの歌声と、生徒たちからあがった“歌の上手な歌手”の歌声を比べて聴いた。その違いを尋ねると「よく響いていて、はっきりと聞こえる」「自分たちの歌声もきれいだけど、歌手はきれいで更に声が響いている」といった、歌手の「声の響き」に関する意見が多くあがった。そこから「響かせる」ということについて考えていく中で、生まれもった声を生かして響かせて歌うことが大切であることに気付く生徒がいた【資料2・3】。



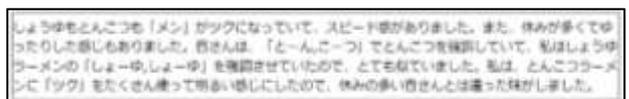
【資料2】ふりかえりA



【資料3】ふりかえりB

『僕のこと』の学習では、ボーカルグループのライブ映像と、生徒たちの歌っている映像を比較した。「自分たちは良い姿勢で歌っていて、歌手は全身で感情を表現している」「より開放的に歌っている」という意見が出た。なぜそう感じるのかを考えさせると、「歌手自身が感情を込めて歌っているから」という意見が出た。この曲に込められた思いと、サビの表現について考えさせる活動につなげることができた。

『言葉の抑揚を生かしたリズムづくり』の題材では、みそラーメン、とんこつラーメンの2種類の言葉にリズムを付ける作品づくりをし、できた自分の作品と仲間の作品を比較した。はじめに似ているところや違いを尋ねると、「8分音符の数が違う」「伸ばす場所が一緒」など、リズムの違いに気付く生徒が多くいた。そこで、「どんな味がしそう?」と尋ねると、「みそ味が濃そう」「(とんとんとんこつこつと続いていて)トッピングを刻んでいそう」など、リズムから受け取る印象について意識する生徒が増えた。もう一度自分の作品を見直してみると「ツクツク(8分音符)が多いから、明るい感じにした」など、リズムのおもしろさを考える生徒が増え、自分の作品の良さに気付くことができた



【資料4】ふりかえりC

【資料4】。

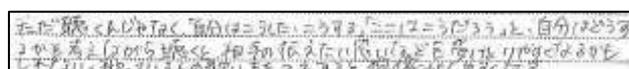
こうした比較をする活動を通して、自らの演奏や作品を振り返ることで、自分たちの新たな課題を見付けるきっかけにつながった。また、題材の導入部にこの活動を行うことで、生徒たちに課題意識をもたせることができ、授業のテーマに取り組みやすくなった。

(2) お互いの音楽表現について、自分なりに価値付けをする取組。

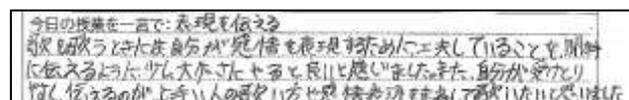
比較をする活動を経て、その題材で身に付けたいことや考えたいことを明らかにした後、歌唱の練習に移った。『僕のこと』の学習では、比較をする活動の中で浮かび上がった「サビにこめられた解放感や幸福感と、その音楽表現」をテーマに授業をすすめた。2つのグループに分かれて歌声を聴き合い、相手グループが“解放感”や“幸福感”を表現するためにどんなことを意識したのか予想させた。予想の結果と照らし合わせてお互いにアドバイスをし合い、意識したことが相手により伝わるように、自分の表現を調整するよう促した。

はじめ、聴き手側のグループに「歌い手側はどんなことを意識したのだろうか？」と尋ねると、「わからない」「強弱だろうか・・・」と悩む様子が多く見られた。歌い手側には、歌唱表現の改善点について話し合いの時間を設けた。その中では「もっと強弱を付けないといけないんじゃない？」「口の開け方や姿勢も大げさにやってみようよ」という意見が出され、聴き手に伝わるように創意工夫する姿勢がみられた。また、聴き手側には「どんなふうに歌ってほしいか」を考えさせ、アドバイスとして伝えるよう促すと、「しっかりとした声で、安定感と迫力が出るようにすると良い」「明るい表情で、聴く方に伝える気持ちで歌ってほしい」という意見が伝えられた。再び発表させると、歌い手側は生き生きとした歌声に変化し、聴き手側は「目線や姿勢などを意識していた」「明るい声になっていて、解放感を感じながら歌っている」など、明確な意見をもつことができた。

発表後のふりかえりには「ただ聴くのではなく、自分はどうするか考えながら聴くと、相手の伝えたい思いなどを受け取りやすくなる」とあり、「どんなふうに歌ってほしいか」を考え、相手の音楽表現に対して自分なりに価値付けをすることや、視点をもって鑑賞することの大切さに気付くことができた【資料5】。また、題材のまとめのふりかえりから、生徒たちがこの活動を通して相手に伝える難しさについて気付き、自分が思っているよりも大げさに表現することや、相手に伝えようとする気持ちが大切であることに気付いたことがわかった【資料6】。



【資料5】発表後のふりかえり

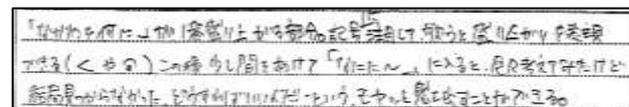


【資料6】題材のまとめのふりかえり

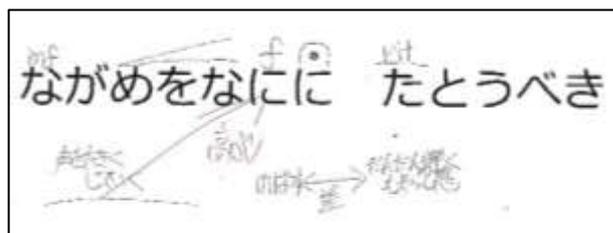
(3) 模倣的な活動を通して、自己の音楽表現について創意工夫するための取組。

『花』の学習の中で特に注目したい箇所として「ながめをなになに たとうべき（3番）」の部分を取り上げた。グループでの練習の中で、生徒が「どうやって高い音を出すの？」と仲間に尋ねる場面があった。上手だと思う仲間の歌い方を模倣するよう促すと、一人の生徒を手本にして歌っていた。しかし思うように歌えず、生徒同士で声の出し方についてさらに詳しく意見を出し合ったり、同時に歌ってみたりと、協力しながら試行錯誤する姿が見られた。

この活動の中で、「なになに」の部分における感情の高ぶりについて詳しく話し合うグループもあれば、mfからの強弱の変化について考えを深めるグループなど、着目点の違いが見られた。「たとうべき」のrit.について考えているグループは、はじめ「終わりだから、おさめるように歌う」と考えていた。そこで、rit.の無い歌い方を提案し、作詞者の気持ちになって考えるよう促したところ、「何にも例えられない、もやっと感じないか」という意見から、「言葉で言い表せないから、音楽で表現したのではないか」という考えにまとまった【資料7・8】。さらに、この部分の歌い方について、声色を優しくしたり、直前のフェルマータをより意識して歌ったり、表現を試行錯誤することができた。



【資料7】表現の工夫



【資料8】歌詞譜（ワークシート）

また、フェルマータの伸ばし方について考えていたグループでは、「〇〇さんは長く、△△さんはそれよりももっと伸ばしている。どれくらい伸ばしたらいいんだろう？」と、比較しながら考えている生徒がいた。フェルマータが付いている理由や、作詞者の思いについて振り返らせることで、「作詞者は感動しているはずだから、二人よりももっと伸ばしてほしいかも」と、これまでの活動を生かして、自分なりに評価することで表現を工夫しようとする姿が見られた。

中には、歌うことに自信がなかったり、表現したいことは分かってもその方法が思い浮かばなかったりと、歌うことにためらいがある生徒もいた。そうした生徒には、まずは現状を言葉で伝え合うことを勧めた。正直に「音がわからないから歌えない」と伝えた生徒に、同じ班の生徒が「この音から一緒に歌おう」と音を合わせながら導こうとする場面が見られた。

タブレットを用いて共有した一言アドバイスの「途中の休符をみんなの息を合わせて歌うといい」【資料9】など、具体的な意見が多く見られた。また「私たちの班とは違って・・・」【資料10】と、自分と相手との音楽表現の違いを認めていたり、「早く切ってしまったために、壮大さに欠けた」「伸ばすところがしっかり伸ばし切れていたらもっと相手に伝えることができていたと思う」【資料11・12】と言う明確な価値観が読み取れる内容から、模倣的な活動を通して生徒たちが曲にふさわしい音楽表現を確立できたことがわかる。

音が出ていたし、強弱の意識をして歌えていたので、きれいだった。途中の休符を意識してみんなのいきを合わせて歌うといいと思った。音を長く伸ばすことは難しいけれど、できるとよりきれいになると思いました。

【資料9】アドバイスA

私達の班とは違って、明るさが少なくもどかしさや曇りが多いように感じました。でも、力強さも入っていたので、もどかしすぎて怒っている様子をイメージしたのかな、と思います。「なににー」の部分が伸びていたため、意識したのが伝わってきました。

【資料10】アドバイスB

しかし、声を切るころが早かったために、壮大さに欠けていたため、そこは改善点だと思つ。

【資料11】アドバイスC

- ・強弱をしっかりと意識されていて夜の眺めがとてもよく伝わった
- ・伸ばすところしっかりと伸ばし切れていたらもっと相手に伝えることができていたと思う
- ・リズムの速さに違いを付ける

【資料12】アドバイスD

6 成果と課題

(1) 成果

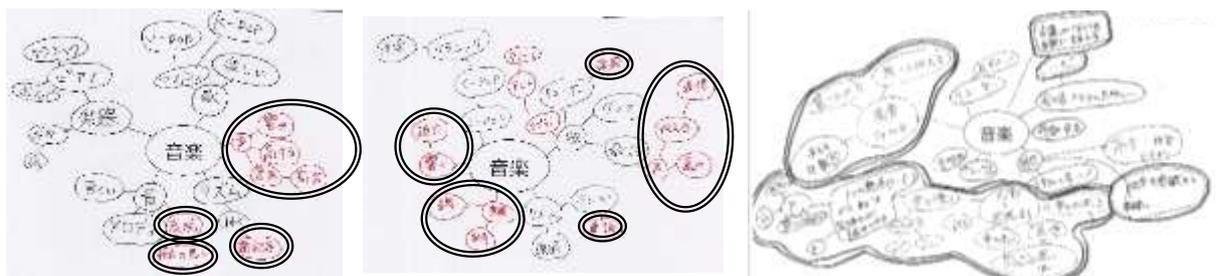
比較をする活動を通して、自らの演奏や作品を振り返ることで、自分たちの新たな課題を見付け、生徒たちが課題意識をもって授業に取り組むことができた。そして、お互い音楽表現に対してアドバイスし合うことで、自分なりに価値付けをして、視点をもって鑑賞することができた。このことについて、実践後の変容を書き込んだイメージマップに、「音楽を聴くときに、新しい発見がある」と書いた生徒がいた【資料13★部分】（※二重線内が変容した箇所）。ここから、授業の中で新しい価値を得たことで、生活の中の音楽の聴き方が変わり、音楽との関わりを深めることができたのだと考えることができる。



【資料13】学習後のイメージマップA

また、お互いにアドバイスし合う活動の中で、聴き手に伝えようとする気持ちの大切さにも気付くことができた。これは、イメージマップからも読み取ることができる。「届ける」「伝える」

という言葉が増え、音楽表現を相手に伝えようとする意識が増したことがわかる【資料14】。



【資料14】学習後のイメージマップB

そして、4人グループでの練習では、仲間との音楽表現を交えた対話や発表、模倣的な活動を通して、曲にふさわしい音楽表現について創意工夫することができた。学習後には、イメージマップ上で「上手になる」と「楽しい」がつながった生徒もいた【資料15】。ここから、歌唱が上達した喜びと、他者との対話の中で、自身の意見や音楽表現が認められた実感があつたのだと読み取ることができる。こうした喜びも助けとなり、仲間の音楽表現を認め、試行錯誤することで、自己の音楽表現を確立することができた。



【資料15】学習後のイメージマップC

(2) 課題

歌声を相手に聴かせたり、発表したりする活動において、人前で歌うことのハードルを高く感じている生徒もいる。また、技術的な課題に阻まれ、表現の確立までに至らないこともある。このような生徒には、発表の出来栄だけでなく、試行錯誤する楽しみに目を向けさせることが、より必要であった。また、抽象的に褒める感想で終わってしまい、適切なアドバイスにつながらない場面も見られた。こうした生徒は、相手の良いところを見るようにしていたのだと考える。今後は「相手のいいところを探そうとする力」を上手く生かし、生徒自身の成長につなげられるようにしたい。そして、生活の中にある多様な音楽表現に対して、自分なりの価値基準をもつには、積み重ねが大切である。これからも、生徒たちがより音楽を楽しめるように、自己の音楽表現について考える機会を持ち続けていきたい。

7 おわりに

今回の実践を通して印象的であったのは、技術的に未熟であったり、はじめは恥ずかしさが勝ったりしていても、練習を通してだんだんと「わかりたい」「知りたい」に変わっていった生徒の様子である。曲の音楽表現にじっくりと考え、試行錯誤する過程で、生徒たちは自分たちの歌声の「物足りなさ」に気付くことがわかった。この物足りなさこそが表現のきっかけではないだろうか。身近な相手の歌声を聴き、「自分もこんな風に歌いたい」「どうやったら歌えるだろう？」という気持ちは、仲間との対話の中でこそ生まれてくる願いであり、新たな価値の習得であるように思う。これからも、生徒たちの願いを大切に、自ら他者と関わる力を育み、音楽を味わうことのできる生徒の育成を目指して、研究を進めていきたい。